

平成28年度 熊本市療育支援ネットワーク会議 代表者会議

日時：平成29年1月17日（火）18：30～20：30
場所：熊本市総合保健福祉センター2階

次第

- 1 開会
- 2 熊本市挨拶
- 3 代表者会議構成メンバー紹介
- 4 議事
 - (1) 会長選出
 - (2) 会長代行の指名
 - (3) 会議のテーマ「地域発達支援ネットワークの構築と充実」について
 - (4) 各地域発達支援ネットワークについて
 - (5) その他
- 5 閉会

出席委員 菊池委員、園田委員、丸内委員、勝本委員、田中委員、米澤委員、井上委員、高田委員、江原委員、大城委員、大谷委員、森川委員、碩川委員

事務局 田中障がい者支援部長、木村子ども発達支援センター所長、神永障がい保健福祉課課長、谷健康づくり推進課副課長、三谷特別支援課指導主事、平山青少年教育課教育審議委員、中村子ども支援課副課長、東野中央区保健子ども課主査、山本東区保健子ども課主査、内田西区保健子ども課主幹、高田南区保健子ども課主任保健師、木庭北区保健子ども課主査、村尾保育幼稚園課主幹、幅熊本市発達障がい者支援センター所長

欠席 林委員

傍聴 2名

- 1 開会
(事務局)
略

- 2 熊本市挨拶
(部長)
略

- 3 代表者会議構成メンバー紹介
略

- 4 議事
 - (1) 会長選出
(事務局)

この代表者会議の取りまとめをしていただく会長の選出に入らせていただきます。会長につきましては、お配りしております資料1「熊本市療育支援ネットワーク会議設置要綱」第6条第2項の規定により、委員の互選により定まるとなっておりますので御推薦がございましたらお願いします。

(委員)

熊本大学の教育学部准教授でいらっしゃいます菊池先生。私が事務局におりました時も、このネットワーク会議をととても素晴らしいとまとめていただきまして、適任だと思っておりますがいかがでしょうか。

(事務局)

ありがとうございました。皆様からの拍手で御承認いただきました。会長には、この後の進行をお願いしたいと思います。

(会長)

改めまして、皆さんこんばんは。熊本大学の菊池でございます。この熊本市の「療育支援ネットワーク」というのは、他の政令指定都市、他の地域ではなかなかないユニークな取り組みです。私も前回の療育ネットワーク委員、実務者会議の方を務めさせていただきました。地域支援のネットワーク型の意味、どういった機能があるのか、私なりにいろいろ考えているところではあります。

私が思うに、療育支援ネットワークには、既に4つの機能があると考えています。その1つは、ネットワークという名が示すとおり、「情報交換の機能」です。これにつきましては、ネットワーク会議の中でも何回も取り上げられ、情報交換機能がうまく果たしていく為に、移行支援シートを作成したり、情報共有のシステムをこれまでもかなり作り上げてきたところでもあります。

もう1つが、今日の議題とも関わってくると思いますが、「リソースの分配」に寄与している部分があるだろうということです。センターの説明の中でもあると思いますが、発達障がいのように数が多い障がいについては、一部の人だけがリソースの恩恵に与れる訳ではなく、必要などころに必要な分だけいかに分配していくかが大事になってきます。ネットワークを構築していくことによって、1次支援、2次支援、3次支援といったような形で、適切な支援体制を作っていくことができる機能があります。

3つ目は、前回の「療育支援ネットワーク会議」の議題でもあったのですが、人を育てていく機能、云わば「研修機能」を持っていると思います。前回の会議の中でも、どういった研修のニーズがあるのかを掘り起こし、各種のアンケート等していただきました。研修がうまくいくための機能があると思います。

最後の1つが、「地域への啓発」を行なっていく機能があると思います。昨年の熊本地震を受けて、支援を要する子どもたちが、災害時に地域の中で居場所がない、孤立する状況となることが少なからずあったのだらうと思います。そのあたりについては、深く検証していく必要があると思います。やはり地域へ啓発をしていく場合に、行政が一方の、例えば「トップダウン型」で啓発を進めるのではなく、地域の中での繋がりを作りながら、地域住民の理解を深めていくことが大切です。こういった点では、「ネットワーク型」の機能では大きなものがあるのだと思います。

「療育支援ネットワーク」の会議においては、これらの機能をより円滑に効果的に進めていくために、どのような手立て、どのような点が問題になっているのかを掘り起こしていくために大切な会議になっているのではないかと考えております。是非とも委員の皆さんには、特に今日の議事の中で、忌憚のないご意見をいただければ良いと思っています。是非、ご協力をよろしくお願いいたします。

(2) 会長代行の指名

(座長)

それでは、続きまして「設置要綱」の第6条第4項の規定によりまして、会長に事故があるときは、会長があらかじめ指名する者が代行する、と記載されています。そのため、あらかじめ会長代りを任命しておかなければいけません。大谷委員の方に会長代行をお願いしたいと思っておりますけれども、よろしいでしょうか。それでは、よろしく申し上げます。

では、審議のほうに入っていこうと思っております。議事(3)の会議のテーマについて、事務局の方から説明をよろしく申し上げます。

(3) 会議のテーマ「地域発達支援ネットワークの構築と充実」について

(事務局)

資料の2をご覧ください。今日のテーマは、「地域発達支援ネットワークの構築と充実」ということで話をいただければと思います。目的は、各区の「地域発達支援ネットワーク」の情報交換です。「地域発達支援ネットワーク」と熊本市の「療育支援ネットワーク」は今でも私もよく間違えるのですが、別の物でして、「地域発達支援ネットワーク」は、北ネットとか南ネットということです。2番目は、中央・西ネットワークの立ち上げです。これをきっかけに立ち上げてくれると助かると思っております。3番目が、ネットワークをどう運営していくかということですけれども、前所長から「笑顔いきいき特別支援教育推進事業」との連携が大きな

いかと提案があったので、それについてお話をさせていただければと思います。あとは、時間があれば会長が言われたように、災害時にこのネットワークを使えないかなと思っております。そこも時間があれば、話し合ってもらえたらと思います。

初めに子ども発達支援センターの紹介と、その役割について話をさせてください。今、会長が言われたので、私が言うことはないのですが、療育システムとしては2つあると考えています。1つは、「ネットワーク型」で、これは子ども発達支援センターがこれを採用しています。もう1つは、北九州の療育センターのように「一極集中型」ですね。「ネットワーク型」は、どういうことかという、地域社会の中で既存の資源を利用し、みんなで障がいのある子ども達に対して支援するというシステムです。みんなでやりましょうということです。多くの職種がかかわる場合は、こっちの方が適しているということです。そして、患者さんが多くて医療行為がなくても支援ができる場合は、もっと適していると私は考えております。ですから、特に発達障がいに関しては、「ネットワーク型」は適したシステムと私は考えております。

次に、子ども発達支援センターの流れを少し紹介させてください。子ども発達支援センターは、必ず親御さんから電話がないと動かないようになっています。電話があつて予約されると、保護者からの聞き取りと行動観察をさせてもらって、その場でできるアドバイスはしています。その後、専門職による評価をしてもらって、診断希望の方は私も入るようにしています。その後、総合カンファレンスで、みんなで話し合って支援方針を決定しております。その後は、診断希望の方は私が説明して、診断希望でない方は担当が説明するようにしています。平成28年8月末では、電話がかかって診させてもらうまでに1.4ヶ月で、それから、一度見てから私がお会いするまでに2.2ヶ月。だいぶ短縮はしていますが、まだまだ待ち時間が長い状況です。その後、お話をした後に初期療育をうちでやったり、地域で園と学校での連携を取ったり、児童発達支援事業所や放課後等デイサービスなどに繋いでおります。よく聞かれるのは「子ども発達支援センターでできることって何ですか？」との質問です。結構、「ネットワーク型」をすると「見えない。」と周りから言われます。「一極集中型」であれば、そこに送れば全部してくれるということなので、みんな助かることではあるのですが、少しまとめてみました。発達についての相談はできます。医者診断はできます。心理士とか作業療法士とか言語聴覚士の検査はできます。ベストな支援は提案できます。初期療育もしております。園と学校との連携もできます。担当による継続面談もしております。

ただ、これをしてないので、皆から「見えない見えない。」と結構矢面に立つことが多いです。医師の定期診察はしていません。定期的な療育もしていません。これが本当に必要かどうか私も疑問はありますが、個人的なことを言わせてもらうと、少し定期診察もしたいと思っております。去年の統計ですが、電話相談が5,540件、来所相談が3,904件、訪問が2,533件、親子グループは初期療育ですが2,811件、にこにこ広場・保護者グループが3,400件、サポート事業といて、うちのスタッフが各区役所に応援に行くのですが5,533件で、ついに1万を超えているのです。その、新規相談者の内訳が8,644名ですね。ピークが3~6歳です。乳幼児が71%、小学生が23%、そして中学生が3.9%です。今こういったネットワークがあるかという、これは、前所長のスライドですけれども、子ども発達支援センターが中心ではないのですが、関わっているところは、こういうところがあります。学校との連携、園との連携、児童発達支援センターの連携、他にもいろいろな連携をしています。また、行政企画ももちろんしています。

今、話し合っているのはここです。地域の「地域発達支援ネットワーク」です。ここを充実していきましょうということです。これは、どういう目的かという、「各区に顔の見える連携と支援を作っていきましょう」というのが主な目的です。これは、「熊本市第6次総合計画」でも、区ごとに「地域発達支援ネットワーク」を作ることになっています。あとで、北ネット、東ネット、南ネットからは報告があると思います。今ないのが、中央区と西区です。どうにかこの会が立ち上げのきっかけになると良いと思っております。これも、去年、前所長が考えられたことですが、総合支援課の「笑顔いきいき特別推進事業」で、ブロックごとに拠点を置いて支援体制作りをして各区毎に全体会をすることになっています。これに今日来られている方の「地域発達支援ネットワーク」をかぶせて、より良いネットワークを作っていけたらいいと思っています。そして、去年の前先生が言われていたけれども、セラピスト集団を中心に他にもいろいろなところと連携をとっていくと、より良いネットワークが出来るのではないかと考えています。以上のことを協議していただくと助かると思っています。時間があれば、先ほど会長も言われていたけれども、折角このようなネットワークがありますので、震災の時に、僕らもいろいろな支援をしたかったのですが、実はどこで誰が困っているのかよく分からなかったもので、それを、このネットワークで震災のときに情報共有化をできるようなことができないかと考え

ています。実をいうと、私、日本小児神経科学会の災害対策委員長に今度任命されて、熊本だけではなく全日本の障がい児の支援をしていかないといけないことになってしまいました。熊本では、そのモデルになるとすごく良いと思っております。私からは以上です。

(4) 各地域発達支援ネットワークについて

(会長)

まず、現在、「地域発達支援ネットワーク」の状況について、すでに活動しております、北、東、南、3つのネット、それぞれからご説明をしていただきたいと思っています。最初に、役割分担書を熊本市と毎年交わしておられる北部発達支援ネットワーク、北ネットから御説明をいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

(委員)

熊本市が児童デイサービスを認可したのが1999年でして、当時は全国の先進的な地域からすると20年遅れていると言われていた熊本市のやり方でしたけれども、1999年にやっと児童デイサービスが2ヶ所認可されて、私はそのあとに今の施設を運営するようになりました。当時は、子ども発達支援センターも無く、児童デイサービスが2ヶ所、それと熊本県ひばり園と、なでしこ園と、三気の家との3つの施設があっただけで、実際に施設を運営し始めたら、何をどのように繋いでいったらいいのか分からず、非常に困っていました。熊本市には情報を共有できる場がないということで、地域療育のネットワークを立ち上げたいという思いから始めました。

大学、大学院と続けて、地域療育システムの構築というのが、私のテーマでした。施設の運営をしながら地域療育のネットワークのシステム作りに、少しでもお力になればという思いから始めたのですけれども、15年前から話を続けた方々がこの場におられるので、思い出しつつになります。第1段階は有志が集まって話を始めました。第2段階で子ども発達支援センターができる前に、市民病院の後ろに、子どもの発達相談窓口で、私たちの気持ちを分かってくださった当時の北保健福祉センター所長に理解していただいて、今のうちにネットワークを立ち上げようということになり、北部地域での「地域療育ネットワーク」を作ろうとしたところでした。北を選んだ理由というのは、自分の施設が北にあったということですが、先ほど言いましたように、ネットワークはどれくらいの規模が顔の見えるネットワークなのかというのを考えていったときに、いろいろな地域を見に行きました。北九州とか大阪の大東市とか、滋賀では津市とかいくつも見に行き情報を集めたのですが、やはり本当に顔の見える距離でのネットワークというのは人口10万人程度のところが上手くいってました。ただし、30万人くらいになると得られる社会資源が、10万人ではなかなか得られにくいというところでした。けれども、北は10万人ちょっとでしたけれども、当時から三気の家もありましたし、おひさまクラブもできましたし、それと理解のある保健センターの所長さんのお力もあって、発育クリニックもありましたし、大学もありますので、比較的恵まれているなと思えました。ただ、ネットワークを立ち上げるときに呼びかけるわけですが、本当に機能するネットワークを立ち上げるには、問題や課題を共有する関係でないといけないのではないかと考え、まず熊本市の乳幼児健診から療育に向かうシステムの中にどういう問題があるのだろうという実態調査をすることが必要ではないかということで、保健師さんたちに情報集めをしていただきました。平成12年度に生まれた子ども達が、平成18年度には5歳になっておりましたので、5年間の育ちを遡ってデータ集めをしてもらいました。その年に生まれた子どもが1268名おりました、そのうち心理フォローに誘導された子どもが57名でした。厚労省が10%程度いるといった、6.3、従来の障がいと言われていた子どもが2%と考えて8.3。それにちょっと入れて、現場では10%かなと思っていたところ、1268名のうちの57名、4.5%しか乳幼児健診でスクリーニングされていないということが分かりました。じゃあなぜだろうということで保健師さんにお尋ねをもらったところ、色んな理由がありました。というところから、北ネットで何を問題にしていくかということとを皆で話し合っただけの4点を考えました。早期発見、早期療育の明確なガイドラインがない、早期発見というのは従来の知的な遅れであるとか、肢体不自由等の発達の遅れに関しては早期発見があたりますが、発達障がいはこれにあたらな。育ってくる過程で徐々に分かってくることが多いので、そういう意味でも難しいということが分かりました。それから、地域の社会資源についての情報が少なく、支援と上手く結びついていない。この頃は、まだロコミの段階でした。お母さん同士が、どこかの病院の待合室で、隣に座って「どうしてる？」とか「あそこに行っているよ。」とか「どこどこに相談している。」というロコミで、やっと療育に結びついていてというよう

な段階でした。

それから3番目、支援にあたる人たちは発達についての知識だけでなく、支援の仕方についての知識や技術の研修の場が必要だということ。保育現場はたくさん子ども達で困っていたけれども、どうしてよいか分からないということが多かったので、そういうふうを考えました。

4番目に、幼児期から学童期への移行支援が大きな課題。この時点でも、園によって非常に温度差があって、上手くいっている子どもと、そうでない子どもがいて、小学校に入ってから非常に苦労する子どもが多いということが分かっていますので、こういうふうを考えました。移行支援がスムーズに行われるためには、日頃から担当者同士が顔見知りになって話し合う関係がなによりで、ここが地域ネットの大きな目的となります。そこで、私たちが自分たちでできる事業として何をしようかと考えたのが、次の4点です。

1番目は、北部地域の子育て支援、早期発見・早期療育等のシステムの再構築。療育のルートを分かりやすくしたいと考えました。2番目は、発達に関する気づきができ、地域全体を理解して支えるための人材作り。たくさん先生達がおられるので、質の向上のための仕組み。それから地域にある社会資源のネットワークによる療育事業の共同実施。いろんな施設や機関があるにも関わらず、単体で動いていて自己完結している、良い療育支援はできないということが分かっていますので、そういう共同実施でできないかということ。それから、幼保小連携を推進する顔の見える距離での支援者ネット作りを決めました。事業の運用にあたっては北ネットは支援者ネットでいこうと決めました。いろいろ考えたのですけれども、各施設、各機関の代表としてくるのではなく、ある1人の支援者としての自主参加にしようということ、今でもここは変わっていません。熊本市との協定は、最初は一緒に事業をしようとして動いていたのですが、大変難しかった。1つのことを決めるのに時間がかかるし、いろいろクレームがつきやすいということで、諦めました。これは支援者ネットでいこうというときに、公立と私立があるという意見がありましたが、子どもに関わる人の給料はほとんど国のお金で立場は一緒ということで、現場主義でいくことにしました。協定書は毎年更新して、北ネットの印鑑も作って、市長印と北ネットの印が押してあります。また、事業の運営にあたっては、今あるものと今いる人の協力でやるということが基本方針ですので、できるだけお金を使わない、お金のかからない事業展開をしていこうということにしました。実際にやっている事業内容を次にまとめています。

1番目が、北部地域発達支援ネットワーク会議、拡大ネットワーク会議と呼んでいます。メンバーについては資料にありますが、これが北区の中でどういうふうに支援体制を拡充していくかという情報交換だったり、意見交換だったり、色んな問題を検討する場というふうにしています。年3回開いておりまして、場所は病院の地域交流館で行っています。

2番目は巡回相談。これは、0歳から3歳6ヶ月健診の間にフォローされない子ども達も、子育ては困難になっている時期ですね。それなので、子育て相談の中から発達障害を発見していこうというような狙いで、巡回相談というものを毎月3箇所の子育て支援センターを場所として開いております。対象としては、子どもの発達に不安はあるが乳幼児健診の心理フォローや子ども発達支援センターに相談することに抵抗があるケースとか、園の担任などの支援者は発達面の困難さを感じているが、専門機関等への紹介が難しいというようなところです。子ども達を遊ばせながらお母さんと相談をする。子育ての相談をしながら、育てにくさ、育ちにくさに気づいていくというような支援をしています。実際にここに当たっているのは、子ども発達支援センターの職員と北区の保健師さん、それから北ネット内の支援スタッフの3機関から1名ずつ出しています。今は、さつきが丘保育園の先生、麻生田保育園の先生、おひさまクラブから私が参加しているところです。頻度としては月1回、3箇所の巡回です。あゆみ子育て支援センター、清水子育て支援センター、西里子育て支援センターの3箇所になります。様々なケースとの出会いとか、保健師さんとの連携とか、できるだけより良い支援ができるようなルートになんとか持っていこうと、みんなで話しながら進めています。資料に27年度の北ネット巡回相談の実施状況を一覧表にしました。こういうふうに3箇所の子育て支援センターを舞台にして、こういう日程で1年間を通して開いています。いろんな子ども達がやってきますけれども、やはり1歳から3歳未満の相談が1番多いかなと。最近では、小さい子を連れて来られるけれども、上のお子さんで4歳とか5歳のお子さんの相談もこの中ででてくるのがよくあると思っています。

それから3番目、北ネットの研修会を年2回開いております。目的は支援者同士の相互交流、資質の向上を図る学習の場であり、2番目に幼保小の連携を進め、顔の見える関係を目指すとしています。実施内容は年度ごとに検討しますが、1回目は毎年11月頃開きますが、支援者の資質向上のための講義を中心に、2回目は移行支援のためのグループワークを中心にやっております。もう9年目に入ります。最後に研修会を一覧表に

まとめております。最初の年は、ネットワークの認知度を上げたいということで、皆が飛びつくような発達障がいについての基礎的なお話をしていくというところから始めました。このときは、意図的に熊日に電話して、こういうことをやるので来てくださいなど、いろいろとやってみました。認知度を高めないとどうにもならないということで始めました。全部見ていただくと分かるように、講師に入ってくださいる先生は北ネットの委員や北ネットに参加しておられる地域の先生たちが、ほぼ中心になります。時々、スクールソーシャルワーカーについてということでは、相談に行ってお願ひしています。感覚統合のときには、保健科学大学の先生にお願ひしたりしていますけれども、ほぼ身内でやっているかなと思います。ですので、講師はできるだけ内部から、できるだけ予算を低予算でということでお金をかけずに研修を進められてきたかと思ひます。最後に、昨年11月の研修会ですが、このとき初めてコラボをしています。北ネットだけでなく、向陽台病院の相談支援センター、なでしこさんとのコラボでしたので、そちらの勉強会とも合同でやっていますので、100名程度の参加がありました。病院の心理士の先生に北ネットに入っていた目的だった幼児期から学童期への移行は進んできていたのですが、学童期の後半から思春期に起きてくる問題をどうしても取り上げなかったので、お願ひして思春期前期から起こってくる不適応行動がもたらす困り感とその対応ということで、かなり内容の濃い研修会ができたかと思ひます。最後に今後の取り組みとしては、今回初めて他団体とのコラボをしました。これからはネットワーク同士の共同を進めるということ。北ネットで活動の1つの方針として提案しているところ。合同研修をきっかけに、委員の皆様にも他のネットワークとのコラボをこれから進めていこうということ。方向付けをして、それを将来に向けて、面のネットワークは北の場合はほぼできたかと思ひているので、これからは垂直方向のネットワーク作りをさらに進めていきたいと思ひているところ。

(会長)

ありがとうございます。丁寧に説明いただきましたけれども、もう一人の北ネットの運営委員ということで、一言ありますか。

(委員)

私も2010年くらいから参加させていただいていますが、やっぱり横の繋がりですね。なかなか普段お会いすることができないことが意外と多いと思ひのですが、直接お会いになることで子どもさんの情報交換がきたりとか、とても顔の見える繋がりがあるのでネットワークだなと思ひています。

(会長)

ご質問などございますか。北ネットの歴史的経緯などもふまえて説明いただきましたが、いかがでしょうか。私からよろしいですか。設立が平成20年だったので、私が熊大に来たのが平成20年の4月で、肥後先生がいらっしやいましたので、肥後先生が今度こういうのを始めるという話を聞きながら、どういった形のものになるのかと見ていました。ただ、当時の熊本市は政令指定都市ではなくて植木地区も熊本市内に入っていないですね。今は北区と言えは中心的には植木地区とか北部ということになるのですが、名前が北部ということになっていますけど、最初はだから必ずしも北区という形ではなかったように記憶していますが、そのあたりは現在どのようにお考えになられているのですか。

(委員)

北区とつけてしまうと、かえって少し狭まるかなというのと、最初が北保健福祉センターの管内ということだったので。私も後で分かったのですが、管内という考え方が、例えば教育はブロックなのです。行政単位といろいろ難しいというので、それと支援者は北に住んでいるわけでもないの、だから緩くやろうというので、北部というふうになりました。

(会長)

なるほどですね。肥後先生から聞いた話では、北警察署の範囲内だから北ネットみたいな感じですね。むしろ、中央区も実は入った地域になると。

(委員)

黒髪も入っているし。

(会長)

大学もあるし、療育資源も結構多いというふうになっていますけれど、結局は中央区も入っているというイメージでいて、今度の議論としては、中央も作るということになってくると、その役割というか区域の問題をどう考えていくのかということで、今の話で聞くと、区域というものにとられすぎないで円滑に考えていくほうがメリットはあるのかと感じますね。

(委員)

ただ、移行支援を丁寧にする支援者ネットなので、移行支援はどうしても校区毎にグループワークをしたほうが顔の見える関係が作れるので、教育ブロックは外さないほうがやはりいいのです。そこはいつも案内状をどういうふうに配布するか迷うところですけども、今は教育ブロックに合わせてやっています。

(会長)

もう1つ質問ですが、移行支援というときに、保育園は必ずしも居住区でないところの保育園に入っていることが多く、いわゆる親の職場の近いところに入る。そういう場合はどういうふうな形なのですか。

(委員)

移行支援のためにやるグループワークですので、ある幼稚園の先生が自分の担当している5歳児さんが就学する小学校のグループワークに入るわけです。直接、子どものことを話せるグループワークに入るわけです。

(会長)

そこにも案内を出すのですか。例えば、北にお住まいのお子さんが中央というか、北ネットの範囲にはあまり入っていないような保育園に行ったら、でもその先生にも、今度この小学校だから来てくださいみたいな。

(委員)

そこまではできない。だから公立・私立の保育園と公立・私立の幼稚園と小学校、支援学校、中学校までは全部案内状を出しますけれども、それ以上はしていない。

(会長)

分かりました。他にいかがでしょうか。

(委員)

その話は確かにいただいていますので、該当児がいた場合には行かせていただいています。それは各園での判断でできるのではないかなど。

(会長)

今のお話で言うと、逆に北ネットはそもそも立ち上げ的には行政主導ではなく市民主導というかですね。今のお話のように、例えば保育分野と教育分野で、そもそもいわゆる居住区と通っているところが違う、その連携の話になってくると、あまりにその例えば地区で分けてしまうとネットワークの良さというのが、かなり薄れてきてしまう。それがむしろ市民主導の形で作ったネットだから、ある程度上手くいっているというか、そういうような形だと感じました。

今説明していただきまして、ネットワークとしては、さっき私が言った通り4つの機能をしっかりと持ったネットワークだと思っております。特に、リソースの分配のというところで、限りある資源をいかに有効活用していくのかという点で、特に巡回相談のシステムなどを持っているのが北ネットの特徴かと思います。

では、続きまして時間も限られますので、次に東区地域発達支援ネットワークということになりますけれども、東ネット会長からご説明をお願いいたします。

(委員)

先生のお話の後でとても気が引けているところですが、もしかしたらちょっと水を差すようですが、このネットワーク会議に問題点が沢山あると思います。一応、簡単に説明させていただきます。発足は、北区とはちょっと違って、親の会がいくつか、いろんなところの学校の、それぞれの発達障がいの親の会とか、色んな親の会がありましたけれども、その親の会が中心になって、関係機関と繋がってきたり、あるいは逆に支援者で、保健師さんが中心になって、東区の保健福祉センターの行政主導と親の会ということで、21年です。それから、いろいろな活動をしてきましたが、会長も、会員も変わりました。それを、北ネットみたいに牽引していくような人がいない。では、今後どうなっていくのかとかですね。それから、やはり有志の集まりというこうとで、果してそのネットワークがやっていけるのかとか、自分の中でとても思っています。自分自身が会長になったのは、誰かなってくれる人はいませんか、みたいなどころでなってしまったので、私自身はあまりネットワークで頑張っていこうという気がないと言ったらとても失礼なのですが、いや、そういう形でしか関わっていないのです。しかも、顔が見えていない東区はその規模と誰が引っ張っていくのかとか、そういったところがやっぱりこれから課題になっていくのかと思います。ただ、親の会の代表の方とかが中心になって、いろんな会議、親さんの相談会を開かれたり、それから東区が移行支援のシートを作ったとか実績はありますが、それが地域の形で繋がってっていないということをととても思っています。ですので、次の議題になるとは思うのですが、やはり熊本市がネットワーク型の療育支援システムというふうになっていった時に、

どこかある程度拠点として、そこにネットワークを牽引するその予算をつけないといけないし、それからフリーで動けるコーディネーター的な仕事をする人を、私としても、自分は自分の施設のことで手一杯ですし、とてもそれを運営していくこととかできないので、それぞれの地区の特徴があると思うのですが、きちっとした形でネットワークとすれば、例えば児童発達支援センターの方に拠点を置いてそこに予算づけをする。ただし、その職員はそこに限らず、職員を雇うというような形でやっていくとか、熊本県が圏域毎に地域療育センターを作られて、子ども総合療育センターからボランティアみたいな形でこうやっているというような、モデルみたいなところをもう少し組織的に考えていかないと、誰かが立ち上げてくださいというようなレベルでやっていいのかとすごく思います。北ネットはすごく上手くやられています、東は今後どうなっていくのかなととても思っています。課題が一杯あると思っています。

(会長)

ありがとうございます。先生どうぞ一言。

(委員)

今年は地震もあって、いろいろな研修会も中止になって、東ネットが計画をしていた、東のそれぞれのブロックの研修会も、その前の年は台風で中止になりました。その前、2年ぐらいはできて100人くらい集まって、地域に学びたいというか、どうすれば支援が上手くいくのかと思ってらっしゃる支援者がとても多くて、学ぶ場が必要なのでしょうけれども、なかなかそこが上手くいっていないような感じです。「りら・くまカフェ」も、今年も6月17日と11月25日と、1回目が福祉サービス、2回目が保育園での関わりについて、3回目が小学校と、2月1日なのでまだやっていないですけれども、先着40名としているものの、今のところ8名くらいしか申し込みがありません。まだ申し込み中で、増えるかもしれないのですけれども、立ち上げのときに、なかなか情報と出会えない人たちをどう支援していくかみたいなことが根っこにあったのかと思うのですけれども、それができているかという、できてないかなというところが正直なところ。基本は今ある、今元々あったそれぞれの会を、いかに機能化させるかみたいなところにしていかないと、新しいのが増えていくばかりだとかどうかだと思います。小・中連携とか、元々の校区でもやられていることを、いかにこう機能的な上手くいった例を出せるかということを考えているのですが、なかなか、どうすればいいかなと。

(会長)

それを出し合うのがこの会です。ありがとうございます。それでは、ご質問等はございませんか。いかがでしょうか。今、現状と課題についてつつがなくお話いただいたと思いますけれども。

(会長)

すみません。「りら・くまカフェ」のご案内というのはどのような形で発信されていますか。ちょっと見せていただきたいなど。

(委員)

幼稚園とか保育園。東区の幼稚園、保育園とかには配っています。

(委員)

やはり他の区の保育園は欲しい情報です。もしよろしければ、連盟とか協会とかにご連絡をいただければ一斉に配るということもできます。

(委員)

そこまで広げるかという話にもなる。

(委員)

あまり沢山きてもらうというのも困るということですか。

(会長)

いかがですか。

(委員)

講演会とかではないので、座談会形式ですというので、そんなに大規模にすることではなくて、先輩の親さんが、後輩の親さんの困っている方達にという、「りら・くまカフェ」という感じなので定員40名ということですね。

(会長)

対比するということではないですが、元々も役割や立ち上げの経緯もかなり違いますので、北ネットの方は、やはりさっき言った4つの機能をかかなり持っている訳です。東の方は、立ち上げは親の会からということもあ

りますが、基本的には情報交換の機能について、かなり集中して行っているということがあります。だから、そのカフェも、そこに「研修機能」があるということであれば、たぶん沢山の人来ていただいてという話になるということですが、そうではなく情報交換としてやるので、あんまり顔が見えないぐらいに来られても、その機能が失われるというような形で行っている。基本的な取り組みっていうのはかなり違うのかという感じはします。だから、東と北で、そもそも持っている機能が違うというところなので、あまり同列に議論していても難しいという感じはします。

あと一つ、支援者を育てる取り組みも、しばらくは、歴史とか、肥後先生もいらっしやっただので、そういうのも取り上げて、簡易的にやるというようなこととかを、幼稚園保育園の先生、学校の先生も来ていただいてやっていたのですが、それもなかなか、頑張っていた方が忙しくなられて、継続ができないとか、そういうようなところになってしまっています。

やはり、リソースという点でいうと、元々持っているリソースが北ネットは多かったというのが1つあります。東ネットはやはり少ないので、あとその情報交換の機能というところでやっぱりきていますので、先生もかなり危惧されていましたが、やはりネットワークというのは、ある程度機能が、こういう機能があるから成立しているという部分はもちろんないと、結局作ったはいいいけど、なんのために行っているのかみたいな話にはなりやすいと思います。情報交換というところかというと、特に保護者的には、今自分が必要な情報が得られるのであれば行くけれども、情報を得てしまって、必要ないと思ったら遠のきます。そのリソースの分配機能とか、あるいは研修機能というのがあれば、特に支援者ですけど、情報交換だけでなく、自分がそこに行けば育つという感覚があればまた人がだんだん集まってくるという形になっていく訳です。そここのところがすごく情報交換だけの機能では難しいという感じはします。基本的にはリソースがどれだけあるかということで当然言われます。だから委員がおっしゃったように、牽引するような、どんとリソースを持っているところが欲しいという話になるのはよく分かる。いかがですか。先にちょっと南ネットの説明までいっていかから、総括的な議論をしたいと思えますけれども。

それでは、南部地域発達支援ネットワークということで、副代表の委員からご説明をお願いします。

(委員)

代表は、元々南部地域発達支援ネットワークのこの会を運営している、親の会の方です。引っ張ってこられたというふうに聞いております。聞いておりますというのが、私が昨年4月に異動してまいりまして、名前だけは小耳に挟んだというぐらいのネットワーク会議でして、実態を全く把握していなかったということもありますし、実際28年度は、地震があったということもあって、具体的な活動が何もできていません。そういうところで、一応お手元の資料に沿って私の分かる範囲で、本当は会長がいらっしやると、今までの歴史的な経緯も含めてご説明されるのでしょうけれども、もしかしたら私よりも経緯を知ってらっしゃる方がこの中にいらっしやるかもしれません。

趣旨は、南部地域において、障がいがあるお子さんや障がい者、またその保護者が地域の中で安心して生活していける環境を作っていくための支援者、それから保護者等が協力し合って、その発達支援ネットワークの構築に取り組むという趣旨になっています。

目的が3つありまして、子どもと保護者が安心して生活できる環境づくり。それから、身近なところで相談できる場を作って、発達及び子育て支援の充実を図る。それから、南部地域の支援者の相互交流と資質の向上というような、3つの目的があります。

経緯としましては、平成21年の6月から保護者や地域の療育施設、保育所等の支援者の有志が集まって、この南部地域発達支援ネットワーク準備会として、毎月1回定例会を実施して検討がなされていた。平成22年からは、さらにその理解者を増やすために、映画上映会とか茶話会を実施して、23年の5月からさらに26年3月までは、「親のつどい」を月一回開催しています。25年の6月には、やっこの南部地域発達支援ネットワーク設立会議を立ち上げて、組織としての承認を得たということになっております。先ほども申しましたように、28年度は、会長だけが残られたということで、元園長も行政の担当の方も交代だったので、今まで牽引していた方がなくなったというところでの不安な面もあり、ここにも書いてありますように、新体制となりまして「親のつどい」のあり方やその支援者同士をつなぐ意見交換会を、今後についてどうしようか、実際は29年度に向けて何をしたらいいかっていうのを、やっど話を始めたというところが正直なところです。前回、11月に、その第1回目の会議を開きました。「親のつどい」をやっていますが、親御さんも、子どもさんの成長と共にやはりニーズが違ってくる。さっき先生の方からも言われたような、自分が必要とするようなもの

のがそこでなければ、やはり顔は出さない。親御さんのニーズも変わってしまっていることもありまして、どこにその焦点を当てて、今後その活動していったらいいかというところは課題ではないかと思っています。個人的なことで申し上げますと、研修で人を育てると、「研修機能」としては、うちの施設が、勉強会を開催していきまして、年4回ほど、熊本大学の先生にも第1回目をお願いしましたが、その時うちが主催する勉強会には、保育幼稚園課に南部の棚があります。その棚に全部案内を入れて、熊本大学の先生のお話、感覚統合についてのお話、あとはクリニックの先生のお話、つい先日は、親さん、育成会の副会長の方に、自分の子育てについてのお話をさせていただきました。そこに、支援者は、保育園、幼稚園、それから福祉サービスの放課後デイ、児童発達支援事業所、それから、実際親御さんも、うちを利用されている方とはまったく関係のない親御さんも来てくださる。研修機能は、なんとか当施設だけでやっているの、これを南部地域発達支援ネットワークとして、もう少し、系統立てたものに変えられたらいいのではないかと、これは、個人的に思っています。結局、人が変わったらできないというようなことでは、なかなか難しいと思います。人が変わっても継続していくためには、システム化というのも必要ですし、それぞれの特徴、南、北、東、中央と西それぞれの特徴あって当然いいと思うし、地域のニーズも違うし、社会資源もバラバラなので、違っていいとは思うのですが、最低、どこに暮らしても熊本市民であるからに、どこの地域にいても、最低これだけのものは保障されているというようなものを、それはやっぱり行政も一緒にやる、行政が入ると難しい点はあるのだらうと思いますけど、やはりそこは、行政が入って一緒に考えて行く必要があるのではないかと、個人的にはそういうふう思っております。

(会長)

はい、どうもありがとうございました。では、ご質問はありますか。

(委員)

質問ではないのですけれども、今みたいな、その熊本市が描いているような、地域療育ネットワークのための拠点等を是非作って欲しいというのをずっと前に、なでしこ園の元の園長先生と、私と、それから三気の家先生と一緒に、何回か交渉に行きました。その時には、どこかにセンター的な機能を置いて、そこに予算づけをして、そういうことを繋ぐ人とか、研修会を企画する人とか、親さんの相談を受ける人とか、地域生活支援事業というのをとって、それをしてくれないかと。全国にも、そういう1つの拠点があってさらにそれにというふうなですね。だけど、市の方は全然それについて乗っかってこられなかったもので、でも本当に今言われたように、続けてこうきちとした形でいくには、やはりシステム化をしないと、誰かがやって立ち上げてということでは、難しいのではないかと思います。自分自身がもし今の仕事をちょっと抜けてその仕事をしなさいと言われれば、私はそういうのはとても好きな仕事なので、地域を走り回って色々やるかですね、したいのですけれども、実際施設を運営して、施設で仕事をしていたら、それはとても難しいことだと思います。

(会長)

はい、ということですがいかがでしょうか。議論の部分にかなり入ってきているような部分もありますが、そこで、委員から出てきた、基本的なそのネットワークのための拠点を例えば作っていく、センター的な機能を持った所を作っていくことに関して、熊本市がどのように考えていたかというのは、それはどっちかという大谷先生の方がよくご存知だったのかもしれませんが、今現在どのような形が求められているのかということも、いろんな考え方があると思いますが、その辺も含めて議論していき、どのような形がよいというのを考えていくのがこの場ですので、議論していければと思っております。では、時間進行の方が非常に気になってはいますが、今、北、東、南、現在のネットワークの状況、活動状況とか、立ち上げの経緯というのもお話いただきました。では、中央区と西区はネットワークがまだない訳ですが、まあどのような状況にあるかということそれぞれの区から、お越しの委員にお答え、お話いただければと思っております。代表とかということではなくて、感じられていることを中心に西区から順番に、お話いただければと思っております。

(委員)

先ほど、新参者という話をしました。本校の持つその地域支援の力を、今からどんどん、発信をしていくところに今、力を入れているところですが、その舞台が熊本市の笑顔いきいきの中で、まあ頑張ろうというところですが、昨年度、南区合同ブロック会に参加をして、そこでやはり驚いたところが正直なところで、これだけの関係者がブロック会議の中で顔を見せあって、しっかりと情報交換できる場が設けられている。やはり、ブロック会議の中で、西のほうも是非やりたいというところで、本当に教育の分野のところを主体に、ちょっと感じたところでありまして。なので、実際に、南区の日吉小学校に先生等にいろいろと聞き

取りをして、巡回相談員、巡回相談の立場であるのですけれども、例えば会場のことであるとか、うちはできたばかりで広い場所もありますので、校長と話して、提供できるのではないかとというところで、少しずつ、根回しをしていたところでしたが、今年はこのような状況でできなかったのですが、是非そういうところで顔を合わせてまずはネットワークをつくると。きちんとしたものでなくても、まず顔合わせをするという場を、できるだけ来年度は準備していきたいと思っていますところ。思いとしてはまずはそういうところから。

(会長)

はい、ありがとうございます。

(委員)

私どもは個人の施設でございます。私は、職種は作業療法士です。26年まで県の子ども総合療育センターに20年間おりました。ここにいるのもその経緯もあってかと思えます。その20年間の中で、県はその当時はまだ熊本市が入っていましたので、二次圏域でして、私はその3年間地域支援班というところにおりました。その地域支援班というのは、各事業所だったり、幼稚園保育園だったり、小学校中学校、高校はそう行くことはなかったのですが、処遇困難事例であったりとか、今いろんな事業所ができてきていますけども、まだそのころは私がいたころは県域に33事業所くらいでした。各事業所の底上げというところに関わらせてもらっていた経緯があります。その内熊本市が政令指定都市になったと同時に私も現場に復帰しまして院内にもどりまして。自分の担当の子どもが熊本市の場合、どういうふうに動いているのかが、どう就学支援をしていったらいいのかというのが、とても対応が困ったことがありまして、私もあと残されたOTの時間を熊本市で何とかできないか、何かお役に立てないかと思って、26年の9月に二本木の方に児童発達支援事業所と放課後等デイサービスを出したところ。実際、西区にそういう施設を作りまして、なかなか県の療育システムと市の療育システムは、違います。うちのような事業所がおかれている圏域が、熊本市では二次圏域ですね。県では一次圏域です。そういうシステムの違いであったり、実際ウェルパルとか保健師さんをだいぶ頼りました。いろいろ相談にも乗っていただきましたが、なかなかうまくつながらないケースも多くてですね。今の現状は、私はたぶん自分で動いていることが多いかなと。自分で動いて保健師さんをつかまえ、相談員さんに担当者会議をしていただき、保育園に伺い、学校に伺い、というような草の根的な、ひとりひとりを手厚く丁寧にとりよう療育を。うちはそして母子療育です。今から課題として私も何点かあげさせていただきたいのですけれども、早期発見・早期療育というものがありますけれども、うちがなぜ母子療育かというところ、保護者支援が私は8割と考えています。その中で母子は絶対外せないというところ、うちは母子療育を、児童発達支援においては母子療育を通していただいています。昨年宇土の方にも事業所を作りましたが、そこも母子療育で通させていただきます。人気はないです。働いている保護者の方が多いですから、なかなか利用していただくことが少なく、それでもうちの施設でと来ていただいているケースも、2年過ぎまして増えてきております。もう1つうちが力を入れているのが就学支援でございます。あまりスムーズな就学支援、障害を持っているからなんか不安で、本当は楽しく就学、ランドセルの準備とかしたいのに、それ以前に学校を決めることすら難しいということで、うちの方では、大体4月5月に保護者会をしまして、ひとりひとり年長さんに担当をつけまして、学校の同行見学から就学を決めるまで、どこに決めるかというところまで対応させていただいています。あともう1つ、やはり西区で今後こういうネットワークであったりシステム作りをしていただくなら、今とても平成30年に向けて事業所がとても作られています。30年が1つの区切りと言われております。その中で各事業所の許可が下りている中、うちもその内の1つということになるのでしょうかけれども、その中で処遇困難事例の対応というところが、どこがどう責任をもって対応するのかというところ、自分のところでどう、その困難事例を、親御さんと共に解決しているのか、学校と解決しているのか、とても心配しているところでございます。というのが、うちが放課後等をもっておりますけれども、2箇所とも重心です。医療的ケアもかがやきの森支援学校を中心とした重心の施設でございますので、発達障害のお子さん方の放課後は受け入れていません。1箇所は児発で発達障がいのおこさまを受け入れていますが、そのつなぎの放課後を持たないというのも、うちとしては、保護者からもとても残念だという言葉が毎年、ここ2年間はいただいているみたいで、なんとか対応しなければいけないのかなと思っておりますが、他の事業所さんに移行しているような状況です。ただ、就学まではしっかりサポートブックまで作って対応しますよということで対応させてもらっています。やはり、今の早期発見にあたり、就学移行支援であったり処遇困難対応だったりというところ、こういう継続的な支援を毎年年長さんには出てくるわけで、お子さんたちに対しての継続的な支援を作るための、続けるためのシステム作りというのは、西区に今回作られるということで大事なことかなと。やはり

基盤のところ、器のところがしっかりできてないと、どんなにみんなを集めて研修をしてもなかなか育ちにくいかなど。県もよく地下大会議室で昔研修をしていました。500人、600人と来ます。今は宇土でやっていますが、1回2回ではだめで、継続的にこういう処遇困難事例などを通して、ケースを通してみんなで叩き合って実際に関わっている人間が底上げ、スキルをあげていくことが大事なというふうに思います。

あともう1つご報告ですけれども、震災時のお話がありました。うちは4月18日からお子さん方を受け入れました。特に放課後等のお子さん達を中心に受け入れました。これは保護者支援が一番の目的です。保護者が動かないと、子ども達も学校に行けない、家で生活できないというところで4月18日から受け入れを開始しましたが、なにせ二本木の施設が被害を受けまして、新屋敷の施設で、お子さん方を搬送して新屋敷の1つの施設で見ました。その中でとても困ったことが、医療的ケアのお子さん、うちは人工呼吸まで受け入れています。なかなか医療用具が整わなくて、親御さんもストックがありません。よく胃ろうから入れる、レギュレーターなどはお母さん方結構使い捨てられます。洗っても結局水がない、家に水がないから洗えないから捨てる。それでストックがないということで、江津湖療育園にもお願いしましたが、なかなかいただけない。熊本市にもお願いしましたが、ちょっと待ってくださいということでした。被害状況を熊本市はよくメールで聞かれることはあっても、なかなか必要なものに関してのお尋ねの対応が難しくって、最終的には北の方にあります、緒方先生のところがつながってらっしゃる全国の重心ネットの方から、佐賀と名古屋からあわせてご支援をいただいて。かがやきの森支援学校が5月の9日から確か再開されたかと思うのですが、そこまでうちは朝から夕方までお子様をお預かりした経緯がございます。木村先生、全国の災害の対応に、なられるということで一応ご報告させていただきました。本当、一事業所としての意見です。

(会長)

続いて委員どうぞ。

(委員)

小学校は大体500人規模の学校で、現在うちに23名の子どもさんがいらっちゃって、知的、自閉症・情緒学級にいらっちゃいますが、うちの教員の経験年数も、私が20年くらい、あとが10年くらいの方がお1人、あとは3年未満とかそういう状況で、大体まあ熊本市の縮図みたいな感じで、半数がとても経験数が少ない、現在熊本市はそういう状況にあります。西ブロックで、よく研修会はブロック研究も行いますが、やはり西ブロックは1人担任の学校がとても多くて、そしていろんな困った事例が起きたときにどこに相談していいのかというのを、その教員の経験値というか、たくさんそういうつながり方を知っている人はすぐにパッとつながれるけれども、分からない人はとにかく戸惑ってしまうというようなことで、やっぱりネットワークが必要だと常々感じています。学校で通常のほうでも、例えば背景に発達障害があるお子さんの不登校の事例のときにも、SSWなどを頼って、そこからじわじわとやっていくしかない状況で、すぐにいろんなところの機関につなぐことが非常に難しいので、ちょっとタイミングが遅れていくのではないかと不安はいつも抱えています。保護者の方も、私、実は北部、南部、東部を経験して西部に今いますが、やはり保護者の方もとてものんびりした地域なので、いろんな親の会とか、そういう医療機関とかへのつながりがとても薄い地域であります。ですから、どこに相談に行ってもいいのかわからないということでウェルパルとかあいばるを活用させていただいているのですけれども、すぐに相談機関が、つながりが早く見つかるとか、あるいはいろんな情報網がパッと回るというようなシステムができればいいと、先ほど委員のお話を聞きながら、私達は公の教育に携わっているものですから、ずっとその学校にいるわけにはいかない、何年かに一度異動はあります。そこに今までたくさん経験をしていた先生がいた場合も、次はもしかするとあまり経験のない先生になるかもしれないと言うと、途端に保護者が不安になられるという状況がたくさんいろんな学校でありますので、システム化されて必ずここにつながると情報をいただけて、そういう経験値の少ない先生方も、安心して子どもさん、保護者さんに関わっていけるというような、そういう場があってほしいと常々思っていますので、できればぜひこれを機会に、市のほうにそういうセンター的なものを作っていただいて、そこからいろんなところのネットワークの底上げをしていただくような機能ができるといいなというのを感じています。それから、今すごく様々な機関との連携を必要とされていまして、うちの学校も放課後等デイサービスは5つの施設と関わっておりますし、病院も、熊大病院とクリニックと、それからまた別の病院、ということで、いろんなところとその都度連携をしているところです。ただ、学校に勤めていますと、結局動ける時間が、子どもさんが帰ってしまっただけで全部デイサービスの方にお渡ししてとなると、4時半以降しか動けなくて、なかなかままならないという状況で困っています。

(会長)

はい、ありがとうございました。西区のことについてご質問とかありますか。共通して出てくる話としては、明らかに西区はリソースがやはりないですね。それで、その中でネットワークを作っていくって、数少ないリソースを円滑にうまく活かせるというのは、どうやみなさん考えているらしいのですが、実際のところリソースの絶対的不足は、いかんともしがたいのでやはりセンターをとというような話が、出てくるのかということでしょうか。では、今度は中央区、順番に委員から。

(委員)

私、巡回相談員をしているのですが、笑顔いきいき特別支援教育推進事業で、各ブロックの研修に出ますが、結構、幼稚園保育園や、高校の参加が増えてきました。そういうところで顔が見えるような関係が、特に、去年くらいから高校の参加が増えてきて、幼保小中、そして高校へという流れが少しできてきているのではないかという気がしています。それで今年度は、中央ブロック5ブロックありますが、その合同の研修として、県立の高校の現状を知る、発達障害の子どもたちの現状を知るという研修を行いました。私が個人的に課題だと思っているのは、幼保から小学校よりも、小学校から中学校へうまくつながっていないと思っています。幼稚園保育園は移行支援シートが、ずいぶん東部のほうも積極的にされましたので、定着してきているということと、もう1つは、子ども発達支援センターが3歳児健診などのフォローをしっかりしてくださっているのので、その効果があっているのかと思います。それに対して、小中学校は本来なら学校として、もっとつながっていかないといけないのですけれども、移行支援シートも保護者の了解の印鑑をなかなかもらえないから渡すことができないというようなところがあります。それともう1つ私自身が課題と思っているのは、特別支援のコーディネーターの担当が特別支援学級の担任が多くて、あとは通級の担任が多いと。本当に課題を抱えている通常学級の担任がコーディネーターの主として活躍している学校が少ないということも、通常学級の担任の困り感とか、その子ども達に寄り添うということがやっぱり弱いのではないのかと思っています。それと、学校現場としては、不登校が非常に増えています。その背景としては、家庭の問題もありますし、もう1つは発達障害というのがあると思うのですけれども、不登校への対応が、なかなかできていなくてスクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーに頼っている現状があります。

(会長)

はい、ありがとうございました。委員、先にどうぞ。

(委員)

はい。先ほどからちょっと行政はという話が出ておりますが、熊本市の保育幼稚園課、市長も含めてですけれども、非常に発達障害ということに理解を深く示していただきまして、私共の現場でお預かりしているお子さんに少し気になるところがあった場合に、1歳児からの補助金の申請を受け入れていただいています。なかなか他県の話の聞くと、ある程度分からないので3歳まで待たないとだめと言われるところが多いと聞いておりますので、それは非常に恵まれている環境にあるとは思っております。またこの間、熊本市からパブリックコメントが出た時に、災害時の件で、やはり災害時こそ公立を拠点とした活躍をしていただきたいという意見をお書きいたしました。介護者を抱えたご家庭はここでお預かりします、妊婦さんがいらっしゃるご家庭はここに集まりましょうと、そういう形で同じような立場の家族であれば、お互いに理解ができるところがあるのではないかという意見を示したところではあります。

個人的には私は、年長児後期と1年生の1学期にかかるカリキュラムを、両方の、小学校の先生方と私共の担任とで一緒にカリキュラムを作るような形で、ネットワークをつなげていきたいというふうに思っております。うちは、発達障がいクラスがラララームというのがありますが、その子達が就学する際は、必ず担当者が各小学校に保護者に寄り添って一緒に行って、その中で学級を選択されるということにも、1人では行きにくいだろうから一緒に行きましょうという形で、寄り添って行ったりはしております。ですから、こういう代表者会議も大事ですけど、現場の先生方の、実務の担当の先生方のネットワークということも、どこかできれば即戦的な力になるのではないかなと考えて先ほどからうかがっておりました。現在、今おいでになっています保育幼稚園課とともに保育指導要録、小学校に送る要録、認定子ども園の園児指導要録も含めてですけど、パソコンでの入力という形で熊本市も踏み切ろうという動きで、明後日の園長会で一回目の話をいたします。すごい条件をつけてですけど、一回やってみてうまくいけば全園に広げていくという形で、書きやすいシート、読みやすいシート、もう小学校の先生達から、読めない字だとか、同じことが書いてあるとか、言われないように私共も研鑽しなければいけないという感じでしていきたい。せっかく要録は熊本市は独自の、

全国にない独自のデータを使って熊本市版を持っているわけですから、将来的には幼稚園さんの指導要録、それから幼保連携型認定子ども園の指導要録と、一本化できて移行シートとも連動できるような形でいくことが一番、現場の人間に対しても先生方にとってもいいやり方があるのではないかと、そういうのをぜひ中央区で深めていっていただきたいと思って今日お話を聞いておりました。

(会長)

はい、ありがとうございました。なかなか、保育士さん達がパソコンを使うというのがなかなか画期的なこととか。中央区ということに限らず、いわゆる現場の現状とか、そういったことをお話いただきました。特に移行支援に関して、委員のほうからも具体的な移行支援の形についてのご提案というのがありましたし、またいわゆる小1プロブレムの問題だけでなく、中1プロブレムですね、その問題、そういったところにも対応が必要なのではないかという話も出たかと思えます。最後にというわけではないのですけれども議論もかなりすすんできていますので、このままちょっと議論をすすめていければと思っています。まだこの区にも属していない形になっていますので、全体的なところでのご意見をいただければと思います。

(委員)

私立幼稚園の方も、保育園と同じように移行シートでやはり幼小の連携をとっておりますけど、特に私の幼稚園は北区の方にごさいます、北区の方は幼小中の非常に連携がよくとれているところで、移行シート関係もうまくつながっていています。それから小学校から幼稚園の方に、その子どもさんの面会に来たりと、行ったり来たりしながらそういうのをやっております。ただ、今日もなんですけどね、やはりグリーゼンの方がいらっちゃって、その方達の受け入れが非常に少なく、今、毎日面接をやっているところです。私共はなるべくお断りすることなく、保護者の方にご理解をいただいて受け入れていきたいという形をとっておりますけれども、やはり認定子ども園、幼稚園というふうに幼稚園協会も存続しておりますけれども、その中で発達障がいの方を受け入れるということは、保育士さんを増やしていかなければいけない状況にあります。その中で保育士さんを増やすことが今非常に難しいという現状と、それから対する費用も、やはりかかりますので、その辺が幼稚園としては受け入れ体制に非常に苦労しているところもあります。それからうちの幼稚園では、各クラス2人体制で受け入れをしておりますので、そうしないとなかなか受け入れが難しくなっておりますので、そういう中で最善の努力をしながら、幼稚園としては対策を立てて動いているところでございます。当然幼稚園の中には、支援クラスを持った幼稚園も、帯山幼稚園とか出水幼稚園とかございますけれど、ただそれではまかないきれない程お子さん達がもうございますので、十分に理解しながら、自分達にできることは精一杯やっていきたいと思っております。

(会長)

はい、ありがとうございました。それでは委員、中央区の現状ということも踏まえながら、あるいは今の現状ということも、統括的にご意見いただけたらと思いますけれども、いかがでしょう。

(委員)

まず1点目は、子ども発達支援センターを中心とした熊本市の療育支援のネットワークをどう作るかということで、10年間私もやってまいりました。その点が1つと、あと、実際に私も定年を過ぎて、地域にある病院に勤めて、そこの中で、一医師として、地域の中の子どものさんたちの困りごとや保護者の今のいろんな悩みと触れあいながら、一人の医師として、現在の活動のこと、一応2点ほどちょっと、要点だけお話をさせていただきます。まず、最初に「子ども発達支援センターをネットワーク型でやってくれ」ということを、私、当初、最初に就任したときに言われました。私は一箇所集中をイメージして、実はこの市役所に入ったのですが、市役所に入ったところ、子ども発達支援センターにケースを全部連れてきて、そこで訓練をして、そして診断もして、その地域に戻していくようなことをイメージしていましたが、そういう形ではなくて、地域の支援者たちが、顔が見える連携を取りながら、一人ひとりのケースに対して、いろんな職種の方たちが携わって、その子たちと親御さんたちを支えていくようなシステムを作ってくれという、こういうふうなお話であったのは、すごく課題としては大きかったと思います。その中で、じゃあ、どういう形が熊本市の、このネットワーク型のシステムとして、イメージできるのかということになったときに、まだ平成の20年前後というのは、発達障害についても、まだまだ、とても理解がまだうまくいってないし、自分の園の中ではこういう子は見れないので、発達支援センターで育てて、園に戻していただきたいなお話もあつたりしました。では、どういう形が一番いいのかとなると、まず幼児期から早く気づいて、早く支援の手を入れるには、まず園の先生方をしっかり支えて、その先生方の研修やら学びの場をまず作って、その先生方が、先ほどありましたけど、

困難事例に園の中で出会ったときにどういふ支えができるかということで、園の中で見る子どもを自らの園の力で、なんとか支える部分、そういうふうな工夫が園の中で先生たちがスキルアップしていけるシステムということで、コーディネーター養成事業を開始しました。その中で、すごく育っていかれて、園の中のキーマンとして活躍されている方も、本当にたくさんおられる。また、園によって、まだそこまで至っていないところもございましたけど。ということで、園の中の力をしっかりつけるといふことと、それから園から小学校に移行支援でつなぐときに、きちとつなげるシステムを作る。そして、学校の先生たちとも連携ができるように。それと先ほどありましたけど、小学校から中学校へつなぐといふところは、ちょっと私もそこまではなかなか、子ども発達支援センターの中ではうまくできなかったのですが、それは教育委員会の中で、特別支援教育のチームの先生方が非常に頑張っているところですけど。一応そういうことも含めて、まず地域に、熊本市に生まれた子どもさんたちをしっかりと支える、それも早期発見、それから園の中で支えていけるシステムを作りながら、それといろんな職種の方たちがしっかりと連携をできるような形、そこで北ネットは本当に理想的な形ですけど、それと同じようなものを東と南に作るといふのは至難の業でございまして、そこには、それぞれに課題はありますし、また、地域の特性もありますし、支援者の方たちのいろんな立場もございましたので、なかなかまだまだ課題は多いなと思っております。いろいろ悩みながら、少しずつでもいいから、地域の中で支援者の方たちが顔が見える連携をしながら、できればその中で情報交換をしながら、そして研修も、支援に携わる方の研修も進めていけるような形をイメージはしてきてたんですけど。理想と現実の違いといふのはいろいろございまして、でも10年前と比べると、すごく地域の力は育ってきたなと思っております。先ほど委員が仰ったように、熊本市でも、熊本県と同様なネットワークの基点となるとところに予算をつけてといふところが、今熊本市の中でもすごく予算が厳しい状況でございまして、なかなか、そういうふうな形になればいいとは思いますが、現実として、児童発達支援事業、センターにお金をおろしていくみたいところはなかなか厳しいと思っております。それは私も行政マンとして10年間働いたあとの、感想でもございます。また、そういうふうなものがある程度作り上げて、じゃあ、自分が今いる病院の一医師として見たときに、いろんな脳性マヒやら、未熟児のお子さんたち、あるいは、いろいろ不器用さをもった発達障害のお子さんたちが、やっぱり現実にとんどん託麻台病院のほうにおいでになりますけど、その方たちの親御さんたちにどういふふうな支援があるよ、あるいはお子さんが行っている園は、この先生がコーディネーターだからこの先生を中心に、この先生といろいろお子さんのことを相談して、そして行かれる小学校には誰先生たちがいるなど、情報を私もいろいろ出していきながら、親御さんたちには初耳のことが圧倒的に多くて、それで、親御さんたちも自分の子を育てるので精一杯で、その園には、どの先生がコーディネーターといふのは、親御さんたち全くご存知ないわけです。そのようなところも、作り上げてきたものの、まだまだ浸透してない不十分さをつくづく感じてはいますので、その辺も含めて支援者たちの顔が見える連携といふのは、ある程度永遠のテーマなのかもしれませんが、そこに向かってやっぱり力を、皆さんの力を結集して、進めていきたいと思っております。少し、感想みたいになってしまいましたけど。

(会長)

はい。ありがとうございました。

今までの議論を通して感じられたことで少し詳しく聞いてみたいといふことがあれば、いかがでしょうか。

(委員)

さらに追加です。あと中央と西に、支援者たちの顔が見える連携のネットワークがまだ形成されていませんので、そこで先ほど木村所長からお話がありましたように、やはり笑顔いきいき特別支援教育のシステムと連動して動いていったほうが一番支援の輪を作りやすいのではないかと、それまでの経験の中から感じているところです。それがどういふ形が一番望ましいかといふのは、ちょっと私のほうから今断定はできませんけど、やはり今ある支援の仕組みに、それをさらにグレードアップできるような、笑顔いきいきの先生方がこの支援の輪の中に、支援者、いわゆる発達障害も含めた障害をもった子どもさんたちの支援に携わる人たちが、うまくその輪の中に一緒に入って、その地域の子どもさんたちを、みんなでどういふふうに連携してやっていけばいいのかみたいなことを考えられるような場が、中央と西にできていくと一番よいと感じています。

(会長)

はい。最初に木村所長から説明があったとおり、いわゆる熊本市の総合計画の中で、西と中央を作りましょうといふので、言っているといふのもあるのですが、ある程度作ることが前提の議論では進んではきていますが、果たして、そこにどのようなネットワークを作っていくかといふ部分が問われているかと思っております。

今日御報告があったとおり、北と東と南でも持っているネットワークの機能はかなり違うわけで、北は私が冒頭で述べたような、4つの機能をかかなり上手く、果たしている。東は立ち上げの経緯っていうところもありますけど、情報の交換という機能が、主だと。南は情報の交換ということに加えて、どうやら地域の啓発っていう部分から最初立ち上がってきているっていう部分がかかなり大きいということです。なら、果たして中央区と西区においては、どういう機能を重視したネットワークを作るのか、もしネットワークを作るとしたら、今、行政主導的な形になるのか、それともやっぱり市民からの、例えば親の会、あるいは支援者の個人的な付き合いの中での立ち上げを待つのか、促していくのか。今、大谷先生からあったような、これはどっちかというところ総合支援課の範疇の話になるわけですけども、笑顔いきいきの事業を活用して、それを拡大していくような形で作っていくのか。いろんな形がおそらくあると思うのですが、どのようなネットワークが求められているのかというのを今一度その地域の実情に合わせて整理する必要があるのかなというのは思いました。

あともう一つ、その北ネットにちょっと改めて聞きたいのですが、基本的に北ネットを立ち上げていくときに、非常にそのいろんなところのデータを集めてきて、先駆的事例も含めて集めてきて、いわゆる CBR の考え方と IBR の考え方ですね。これがかなり軸になっているような議論がずっと今日続いたなと思っています。要するに、どこかにセンター的なところをきちっと作って、そこが中心的な役割を果たすようにして欲しい。あるいは、センター的な部分はあるのはあるのだろうけども、うまく回っていくように CBR 的な、コミュニティベースの形でちゃんと療育のシステムを作っていく考え方ですけども。どうですかね。西とか、北と比べても難しいですよ。

(委員)

肥後先生と私との考えで、一番ピタッときたのは CBR です。最初から CBR で行こうというのが、基本です。

(会長)

そのときに、どのくらいのリソースがあるところだと、CBR のほうがむしろよくて、どれくらいだとやっぱ IBR で進めたほうが良いという部分。今、その人口 30 万人以上になるとうんぬんという話が出てましたが。

(委員)

そうです。30 万人というのが滋賀県の大津市でした。30 万だと、センター機能がすごく大きくて、やるのだけでも、やはりセンターに頼ってしまうという。

(委員)

そうそう

(会長)

パイが小さいからですね。

(委員)

あの大きくてですね。地形も考えました。大津市が難しかったのは、琵琶湖に沿っている町なので、余計に難しかったというのは、大津の方は言われました。熊本市の場合も、北を考えたときにも、熊本市は城下町なので、道が放射線状になっていて、北だけでも、57 号線、飛田バイパス、3 号線、人の動きがぜんぜんバラバラです。これをネットワークでつなぐのも大変難しいなと思って、地形から考えました。人の動きとどこにセンター機能を持たせるかというのは、実はその人口だけでなく、地形とかですね、リソースだけじゃなくて、人の動く動線というか、そういうとこまで考えないとイケなかったのです。

(会長)

パイとしては、大きな枠組みとしては、熊本市の人口 72 万人という枠があって、それを行政区として 5 つの区に分けたときに、ある程度人口が均等になるような形でわけてしまいました。そのときにそれまで使っていたリソースというのは、どうしても城下町の特性的に、どちらかというところ中央に集まってきているっていう部分がどうしてもあって、それをうまく区ごとに分配していけるのかという、その根本的な問題がやはりあるわけです。

(委員)

よろしいですか。西区について、この辺で話していましたが。

(会長)

もうすでに作る話ができている。

(委員)

大学はない。医療機関はない。そして個々の事業所はありますが、皆さん個人個人でされていて、横のつな

がりがない。となると、やはりある程度公共の機関主導でいかないと、その核となるものが、今考えたらかがやきの森支援学校しかないというところで、本当にその牽引者がいないというか、作らないといないという感じがあります。自然発生的には、なかなか難しい。

(委員)

やっぱりそこは意図的にやらないとネットワークは立ち上がらない。

(委員)

だから、役割を、目的意識を共有できる人が数名。

(委員)

中心にならないとですね。

(委員)

動かし始めないと人は集まらない。

(委員)

すいません。ちょっと誤解されている。私はセンター的というのは、何も建物を立てるとかということではなくて、考え方は CBR です。ただ、さっき言ったように「どこかやってください」ということではダメなので、そこに何か中心になる人たちがあって欲しいのですね。(集まる場所とか。)そこを引っ張っていく、計画を立てるとかそういうことはしないとやっぱり難しい。

(委員)

それで、あの笑顔いきいきと連動してと仰ったのですが、やっぱりその笑顔いきいき自体も、それぞれ職業を持ってやっているものですから、なかなか自分自身が身動きがとれない。いろんな学校に要請を受けて行くこともあるけれども、自分のクラスの子どもを置いて行かないといけない状態で、非常に厳しい状態の中でやっていて、ここで立ち上げて頑張らないといけないとは思いますが、なかなか動く時間が本当に限られているので、さきほどもおっしゃったような、ある程度の枠組みがどうにかならないか。

(会長)

そうですね。だから、決して箱物を作って欲しいというわけではないけれども、リソースと言っているのが、その単純に、institute として作ってくださいという話ではなく、人的なリソースというところも含めてですね。

今の話に加えて、もう1つ思ったのは、最初の木村所長の説明にもあった通り、その障害種別に応じて、どのような形が望ましいのかというのは、多分それは異なるわけです。つまり、ある程度、重身とかなってくると、やっぱり IBR 的な部分のものが欲しい。これは、人数というか、結構限定されていくので、それはいわゆる地域毎という形でなくても、集約させていく形でもおそらくうまく機能するのだろうと。ただ、発達障害みたいに人数が多くて裾野が非常に広いという部分になってくると、顔の見える連携とか繋がりとか移行支援させていくという部分が非常に大事になってくるという。そのあたりをいろいろ整理して、どういう形のものかいいのかというのを分析していくとことが、おそらく必要になるのかと思っています。

(委員)

10年目に突入しようとしている北ネットをやってきた感想ですけど、やはりうまく回ってきたというのは、多くをやるうとしなかったということです。これだけをしましようという、こじんまりとして、お金が掛からず、皆さんのちょっとしたアウトリーチを集めて動くということなので、北ネットこうしてやっていますけれども、大きく時間的に束縛されることは全くないのです。年間ペースで行きますので、本当に自分でできる範囲でというか、肥後先生に言わせると、肥後先生と私の趣味と言っていたんですけど、手弁当で始めた時には、やっぱり動かしてみると大きな意味を持つてくるので、その最初の牽引っていうのはやっぱり有志で動かし始めるっていうところが大事かと思っています。

(会長)

同じ話に結局戻るのでありますが、やはり北部はリソースが多いので、皆がちょっとずつアウトリーチしていけば塵も積もれば、凄く大きなものになってくる。その絶対量の問題というのがおそらくあるような気はします。だからそこからがやはり難しいわけです。

それでは時間になりましたので、震災についての話、災害時のネットワークについて協議する時間というのは、正直あまり取れなかったですが、それぞれ先生方から個別にご意見はいただいていたところではありますので、そのあたりで少しちょっと事務局の方でまとめていただければとは思ってはいます。今日の会議の結果を受けまして、次年度1年間を通じまして、この会議の中で、話し合ったこと、そのあたりを事務局の方でも

まとめていただきながら、各自の委員が地域のいわゆるネットワークに携わられている方は、その活動、それとより良い療育支援ネットワーク、どのような形が一番いいのかというのを考えていただいて。そして、西区、中央区に関しましては、今日具体的な話が進んだみたいですので。そういったことも含めましてこの地域発達支援ネットワークをどのように上手く動かしていくか、そしてそれが熊本市の療育ネットワークにどのような形で寄与できるのかということ。そしていわゆるこの逆に言えば、熊本市全体としてこの療育、地域発達支援ネットワークに、どのような支援ができるのか。そういったことを考えていければというふうに思います。

それでは、時間が過ぎてきていますので、次年度その活動についての報告をしていただけたらと思っています。それでは、これにて、一応、議事の方は終了しまして、諸連絡を事務局の方からお願いいたします。

その他

(5) 次回の開催について

(司会)

菊池先生、本当に的確な議事進行と、委員の皆様からは本当に多方面からたくさんのご意見を出していただき、深めていただきましてありがとうございます。次回は、開始時間を少し早められないかと思っています。

(会長)

時期的にはこのくらいの1月の初めくらいとか、日を早く決めておいて、16時半くらいでどうですか。

(補佐)

子ども発達支援センターでも、西区担当、中央区も担当を決めておりますので、よろしくお願ひしたいと思っております。

5 閉会